

「あげる」ということば

前田正人

「物をあげる」あるいは「何かをしてあげる」の「あげる」は、語源から見てもわかるように、もともと下から上へという気持を含んだことばであって、少くとも目上の者から目下の者へ、という場合に用いるべき語ではないはずである。ところが、最近はたとえは医師に向って「子供に）お菓はいつあげたらいいでしょか」というようなことを平気で言う母親がいる。ことばのセンスのなさをみずからさらけだしているだけでなく、医師にまで親馬鹿のつき合いをさせているようでもたしなど、大いにひっかかりを感じる言いかたなのだが、こういう表現をおかしいと思わない人がふえつつあるようだ。

「えさをあげる」という。「言語生活」という雑誌に、滑稽なことばづかいの例を集めた

欄があるが、その中に、動物園の立札に「えさをあげないで下さい」という例があげられていたことがあった。二十数年も前のことだったが、授業で敬語の話をした時、この例をあげたら、当時の学生達は一齐に笑ったものである。ところが、最近の学生達に同じ例をあげて見せても、何がおかしいかという顔をしてきょとんとしている。テレビドラマなどでも、親から子供に、人間から動物に「あげる」してあげる」というせりふがしきりに出てくる。若い俳優だけでなく、ベテランの俳優まで臆面もなく使っている。たとい脚本がそうなっているとしても、どうして修正しようと思わないのか不思議な感じがしてならない。

しかし、これは一般の風潮で、とりわけ東京あたりでは、こういう言いまわしが巾をきかせ始めているようである。国立国語研究所から「幼児の文法能力」という報告書が出ているが、その中に就学前の幼児を対象として「桃太郎は犬にきびだんごを……。」という文例について……の部分に「やる」「あげる」のどちらを使うかを調査した結果が示されている。これによれば、東京では「あげる」を扱ふ幼児が多く、京都・和歌山では「やる」

する大人達のことばづかいの影響によるものであろう。

なぜ、こういうことばづかいが発生したのか。それは、わが子をあがめるとか、動物愛護の精神によるとかいうようなことではなくて、「あげる」は上品なことば、それに対する「やる」は野鄙なことばだというような単純幼稚な発想によるものらしく、どうやら東京あたりの女性が創始者であるようだ。創始者も創始者だが、それを平気でまねる人間の鈍感さが齒がゆくてならない。

かなり昔のはなしたが、恩師・沢瀉久孝先生が、関西では「はばかり」という奥ゆかしい表現があるのに、東京あたりの女性が使う「御不浄」という、不浄に美称の御をつけた変なことばが巾をきかしているのをたしなめられたことがあった。対象がはばかりのべきものであるためか、その呼称は変って、今では「はばかり」はもとより「御不浄」ということばもほとんど耳にしない。しかし、「あげる」の方は、この調子ではあとあとまで生き残って巾をきかせそうな悪い予感がする。もう手遅れかもしれないが、同憂の士は、この「あげる」退治に力をかけてほしい。

(まえだ まさと 文学部教授)